

脳炎後遺症のある女兒への認知教育的指導支援アプローチ

オンラインセッションを通じた表現手段拡充の検討

○岡崎慎治

武村知保

（筑波大学人間系）

（筑波大学心理・発達教育相談室）

KEY WORDS: 脳炎後遺症, プランニング, オンラインセッション

（目的）

新型コロナウイルス（Covid-19）感染症拡大は世界的な活動の制限をもたらしており、種々の教育相談活動も例外ではない。脳炎後遺症のある子どもについては、種々の合併症にともなう感染リスクの高さから対面の相談やそのための移動に大きな制約があるとともに、ウェブミーティングによるオンラインでの相談についても相対的に大きな制約がある（Centre for Neuro Skills, 2021）。

双方向のやり取りの制約に代表されるオンラインのデメリットに加え、画面への集中を要することにもなう神経疲労や注意散漫はその制約を助長すると言わざるを得ず、おのずとオンラインでの相談活動そのものに制限が生じることとなる。一方では、オンラインならではのメリットやタブレット等の ICT 機器の利用、アプリの活用で適度な注意集中を促すことも期待できることから、感染症終息以後もオンラインでの相談活動や ICT 機器の利用はニューノーマルな相談形態として検討の余地があると考えられる。

本報告では新型コロナウイルス感染症拡大にともない対面での相談活動が困難になった中でオンラインセッションを中心に対象児ならびに保護者とのやり取りを継続して行い、学校を含む生活場面でのタブレットを用いた写真、動画の活用が促され、学校における学習面の評価にもよい変化が生じた脳炎後遺症のある女兒について検討する。

（方法）

対象児：生後 6 ヶ月時にインフルエンザ脳症に罹患、医療機関にて脳炎後遺症としての知的発達障害の診断を受けていた。本報告の指導時は特別支援学校高等部 3 年に所属し、C 大学の教育相談に月 1 回程度の頻度で来談していた。DN-CAS の結果（12 歳 1 ヶ月時）はプランニング 40（90% 信頼区間 38-48）、同時処理 52（50-66）、注意 46（45-62）、継次処理 56（53-68）、全検査 40（38-48）であった。ファッション等興味関心が向けられる活動はあるものの転導性や記憶保持の困難さが目立つ。コミュニケーションがとれないわけではないものの、理解の伴わない表面上のやり取りをしやすい。そのため本人の困り感や深刻さが周囲（特に支援者）に伝わりにくく、援助の必要性（本人の苦手なこと）が支援者の気づきにつながりにくいことが学校や実習先でも課題となっていた。

指導の経緯：対面実施時の教育相談では実習や生活に関連する日常の問題解決場面を例示し、正しい時系列に並び替えたり、それぞれの場面の説明を求めたりといった活動を行っていた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大にともない対面での相談活動が困難になったため、メールや SNS でのやり取りとともに数回のオンラインセッションを実施した。各オンラインセッション実施前に問題解決場面を扱う動画をオンラインストレージ上で閲覧できるようにしておくとともに、動画に関する質問への回答や感想の記載を求めるファイルも送付しておき、オンラインセッション実施時にファイル内容の確認をおこなった。これと並行して対象児と保護者と指導者とでクローズな SNS のやり取りを行っており、その経緯も分析の対象とした。

（結果）

（1）動画を活用したオンラインセッションの推移

口頭でのやり取りのみのものを除き、6 ヶ月で 5 回行った。いずれのセッションにおいても動画の視聴とファイルへの回答は事前に行われており、オンラインセッションでは回答済みのファイルを画面共有して口頭で確認を行った。

その中で、第 2 回のセッション後に保護者の促しに応じて対象児が動画を参考にして家事作業を行ったことが、保護者からの画像送付により事後報告された。第 3 回でも同様の事後報告とともに、学校の作業でも画像や動画での作業記録とその報告を学校側に提案したことが保護者より報告された。あわせて学校側より、定期的に行われる特性評価において高等部 1 年次の評価（書くことによる表現が困難）が、3 年次の評価では（タブレットを用いた報告では）書くことは得意とした報告がなされていた。続く第 4 回では動画の事後報告とともに、学校の作業実習の振り返りを写真と文の電子データで記載したことが報告された。第 5 回では対象児が学校での作業を動画撮影したものに自ら字幕付与した動画データを振り返るとともに、学校で他生徒や教員とともに閲覧するための動画作成の方法について相談した。その結果、学校行事の練習のための動画として他生徒や教員と共有されるに至った旨事後報告がなされた。

（2）SNS の書き込みの推移

上記の指導と並行して、対象児と保護者と指導者とでクローズな SNS のやり取りを行った。当初は保護者の書き込みが多く、やり取り自体も聞かれた質問への単語での定型的な応答になる傾向がみられた。その後、本児自身からの写真の投稿が増え、オンラインでアクセサリ紹介を行った以後、自発的に振り返りを要望したり、指導者への質問や要望が出たりなど能動的なやり取りに変わっていった。投稿内容にも関連性が出てくるようになり、相手に伝わるような表現の工夫が写真選択や文構成（漢字の頻度が増加、単語から修飾する内容、感想等の表現）も変化していった。

（考察）

オンラインセッションとそれに関連する諸活動は、対面での教育相談実施に制約が生じたためではあったものの、結果的に対象児が自分で撮影した動画に字幕を付与したり、動画による確認を自分のペースで行ったりといったメリットにつながったことは意義あるアプローチだったと考える。

あわせて、SNS でのやり取りが並行して行われたことも、SNS でのレスポンスの早さ、表現の広がりが見られたことから、記憶の想起、文章作成に対する苦手意識の軽減、他者に表現する意欲の向上に寄与したものと考えられる。

（文献）

Centre for Neuro Skills (2021) Coronavirus And CNS Preventive/Protective Measures.

<https://www.neuroskills.com/about/news-and-events/coronavirus-and-cns-preventive-protective-measures/>
(2021 年 5 月 9 日閲覧)

(OKAZAKI Shinji, TAKEMURA Chiho)